

日本に生息するチョウのなかで、人間による自然破壊の影響をもっとも強く受けているのが草原性のチョウだといわれている。せまい国土にこれほどまでの数が必要かと眉をひそめたくなるゴルフ場開設のために、いったいどれだけの自然が失われたことだろうか。チョウの発生にふさわしい草原の減少は、もちろんゴルフ場開発だけではなく、営農形態の変化によって定期的な草刈などが行われなくなって単調なススキ原へと変化したことも大きいだろう。土手や堤防にあっては逆に河川工事など人為的開発によって自然環境を大きく変えてしまったことが影響していると思える。絶滅危惧種指定となったなかで、かつては北海道をのぞく本州から四国・九州にかけて広い範囲で普通にみられていた草原性チョウの代表格：オオウラギンヒョウモンが、いまでは中国地方と九州の一部だけでしかみられなくなっている。

ここで話題にしたいウラギンスジヒョウモンは、もともと一度に複数個体をみられるようなチョウではないが、2012年に**絶滅危惧種Ⅱ類**の選定チョウとなってしまっている。やはり、幼虫時代を過ごすための草原性環境の減少がその大きな要因だと思われるが、筆者がウラギンスジヒョウモンに初めて出会ったとはっきり思い出せるところは1993年の夏に訪れた妙高笹ヶ峰高原である。広い牧場があって、家族で散策できる広大な草原もあり、休憩場の屋根軒下部分が分厚い藁仕立てで独特のむんむん感を漂わせており、なぜかその壁面などにミドリヒョウモンやメスグロヒョウモンがたくさん集まっていて、そのなかにウラギンスジヒョウモンとオオウラギンヒョウモン、それに比較的珍しいクモガタヒョウモンも混じっていた。草原に咲くアザミやヒヨドリバナなどにはウラギンヒョウモンとギンボシヒョウモンが多かったがオオウラギンヒョウモンはいなかった。



Aug. 2, 1993 妙高笹ヶ峰高原  
ウラギンスジヒョウモン

裏面

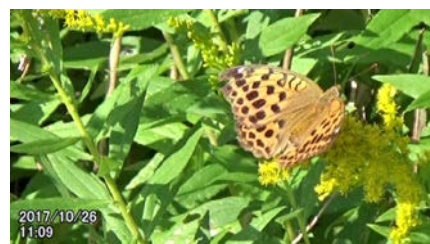
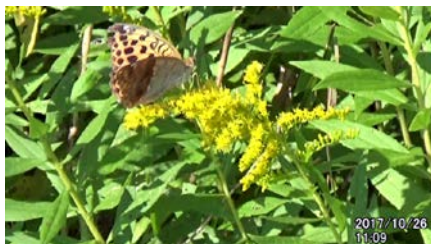
一般的に、あのチョウにはいつごろどこにゆけば会える、といいきれぬ種はいくらかあるが、通常、ウラギンスジヒョウモンは、会いたいのであそこに行こうなどと簡単にいうことができない種である。ところが、ありがたいことに発生時期となれば必ず出会えるのが兵庫県加古川市だ。希少種となったチョウをあえて採集したいという困ったチョウ愛好家がいるので具体的な発生場所は示せないが、かなりのスピードで飛び交う姿を確実に観察できるところだ。しかし、このチョウの写真記録をとろうとしても、アザミの花があるのになかなかその求蜜現場には出くわせずもっぱら飛び交う姿をみるだけということが続く。それでもあきらめずに活動がそれほど活発化しない午前の早い時間帯なども訪れて機会をうかがっていたら、やはり努力はするもの。いき



なり目の前のブッシュに舞い降りて休息する場面に出くわしてじっくりとビデオ撮影ができた。こうした時間帯を知ってさらに二度目の撮影チャンスも得て、木の葉上に静止して翅を開閉する場面もしっかり撮影で

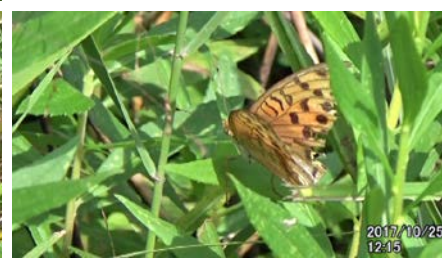
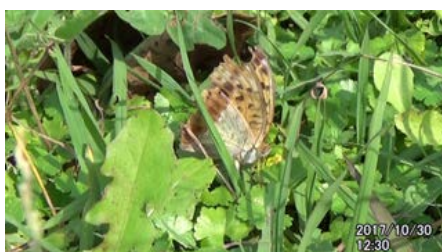
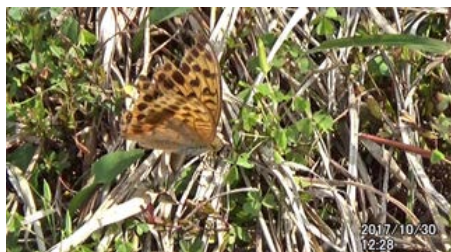
きた。あとはアザミなどの花を訪れるシーンを撮りたいし、生活史も追ってみたいものだ。

Oct. 25-26, 2017 : 秋型のキタテハとの出会い目的で、セイタカアワダチソウが咲くポイントへとサイクリング。新鮮なヤマトシジミが多く、翅表全開で日向ぼっこをする姿の撮影記録を撮り終えたそのとき、路傍のブッシュ奥から大型のヒョウモンチョウが飛び出してくる。例年、6月と10月にこの地域一帯で見られるウラギンスジヒョウモンの♀個体で、実は本種との出会いも密かに期待をしていたわけだが翅の傷みはかわいそうなほど。この日はその記録を撮っただけで帰ったが、産卵してもらって飼育を試してみたくなり、翌日に再訪問。翅の傷みが大きい個体はどこかへ行ってしまっていて会えなかったが、休耕畑地の草原から別個体が飛び出てきて、産卵行動らしき飛び方を繰り返すので注意をして追いつけると、産卵をすることなくセイタカアワダチソウで吸蜜し始める。その様子をしっかりとビデオ撮影してからネットインし、周辺でスマレを探してみる。食痕のある株など少ないながらいくつか採取でき、もしかしたら本種の発生地として特定できるかもしれないとテンションアップ。帰宅後自宅のベランダに自生するスマレと合わせて鉢植えにし、夜の散歩途上でみつけたセイタカアワダチソウの瓶挿しを添えた吹き流し内に母蝶を入れてもらう。これで産卵をしてくれればいくらかは生活史を解きほぐせるかもしれない。



#### Oct. 30, 2017 ウラギンスジヒョウモンの野外自然産卵

10月26日に会ったウラギンスジヒョウモンのお母さんと感激の再会ができ、セイタカアワダチソウの花蜜を楽しむ様子をたっぷりと撮影させてくれたあと、ちょっと目をはなした間に姿が見えなくなる。あそこまで翅が傷んだお母さんに産卵を期待するのは無理だろうと早めの昼食タイムとし、足元で目につくスマレ類で葉っぱの表裏や茎まで調べてみるが卵は見つけれない。少し範囲を広げて調べようと足を踏み出したそのとき、いつの間に現れたのか明らかに産卵



場所を探す動きを見せる先ほどのお母さんが目の前に。すぐにビデオカメラをONとしてその動きを追う。お尻をまげて確かに産卵をした場面をVideo記録から静止画として切り出すと、場所を特定できそうな環境特徴がいくらかあるが、休憩し始めた記録を撮ってからあらためてこの画像を参考にして産卵の確認をしようと思って探しても、なぜかその場所が特定できない。



それほど広い範囲ではないというのに産みつけた直後に見ない限り、卵の発見は容易ではない。

May 4, 2018 幼虫を発見

越冬後の幼虫の成育度合いを推定して 2018 年 5 月 4 日に現地を訪ずれ、メスが産卵をしていた場所一帯でアリアケスミレの周辺を調べた。食痕のある株を目印として探し続け、深い草むらに埋まるアリアケスミレの根元近くに潜む中令幼虫 1 個体 (体長 15mm) を発見できた (図 1)。



この位置に目印をつけて 5 月 9 日に再訪問し、終令となった幼虫 (体長 28mm) がアリアケスミレを摂食している場面も撮影記録できた (図 2, 3)。この記録は本種の幼虫がアリアケスミレを食草としていること確かな証拠となる。その後、5 月 12, 15 日に幼虫を探したが発見できなかった。

兵庫県で本種幼虫の食草を特定できたのは今回の知見が初めてのことで、「きべりはむし」に投稿し受理された。